

# 日本ロシア文学会会報 第27号

## 2005年8月

1. 2005年度(第55回)定例総会・研究発表会日程 2. 7月理事会関連事項 3. 学会賞決定 4. 会員異動 5. 会誌編集委員会より

### 1. 2005年度(第55回)定例総会・研究発表会 日程

第55回定例総会・研究発表会は、きたる10月8日(土)、9日(日)の両日、早稲田大学国際会議場(文学部とは場所が異なりますのでご注意ください)で開催されます。

また、10月7日(金)には、プレシンポジウムならびに関連企画が開催されます(詳細は2頁)。

以下、日程をご参照の上、同封のはがきで当日のご予定を9月16日(金)までにお知らせいただくようお願いいたします。

なお、本年度は会長選挙の年に当たります。同封される投票の案内にしたがって投票下さいませようお願いいたします。

#### 10月7日(金)

ニコライ堂見学	13:00-14:00
プレシンポジウム	15:00-17:00
協賛 ラフマニノフ《晩禱》全曲演奏会	19:00-20:30

#### 10月8日(土)

開会式	9:20-9:35
研究発表(A会場、B会場、C会場)第1ブロック	9:35-11:50
各支部総会	11:55-12:55
研究発表(A会場、B会場、C会場)第2ブロック	13:00-14:40
理事会	14:45-16:15
定例総会	16:20-18:00
懇親会(12頁をご覧ください)	18:30-

#### 10月9日(日)

研究発表(A会場、B会場、C会場)第3ブロック	9:35-11:50
各種委員会	12:00-12:55
研究発表(A会場、B会場、C会場)第4ブロック	13:00-14:40

研究発表については、8日午前(第1)、8日午後(第2)、9日午前(第3)、9日午後(第4)というように時間のまとまりごとに「ブロック」と記載しています。

なお、当日会場での録音・書籍等の販売を希望される方は、事務局までお申し出下さい。

#### 緊急!

会報第26号でご案内した、静岡県・日本ロシア文学会共催の国際文学シンポジウムの参加申込みがまだお済みでない方は、同封のリーフレットを参照の上、至急お申込み下さい。(締切りが8月31日となっておりますが、その後も数日中は受付可能とのことです)

# プレシンポジウムおよび関連企画について

総合テーマ「ロシア正教と日本」

## 1. ニコライ堂見学

日時：10月7日（金）13:00～14:00

場所：日本ハリストス教会 東京復活大聖堂教会

[東京都千代田区神田駿河台4-1-3 JR中央線御茶ノ水駅、地下鉄丸ノ内線御茶ノ水駅、地下鉄千代田線新御茶ノ水駅下車 電話：03-3291-1885]

13時から10分ほど簡単なガイドがあります。見学料：300円

## 2. プレシンポジウム

日時：10月7日（金）15:00～17:00

場所：早稲田大学 国際会議場 井深大記念ホール

中村健之介氏「ニコライの見た日本とロシア（仮題）」

御子柴道夫氏「ソロヴィヨフからロシア正教思想へ」

司会：伊東一郎

ゲスト出演：ナターリヤ・グジー氏「チェルノブイリの祈り」

バンドゥーラ弾き語りとお話

## 3. 協賛：ラフマニノフ《晩禱》全曲演奏会

日時：10月7日（金）18:30 開場 19:00 開演

場所：東京カテドラル聖マリア大聖堂

[東京都文京区関口3-16 最寄り駅は山手線目白駅、都バス61番で10分、目白通りの椿山荘前で下車、または地下鉄有楽町線護国寺駅より徒歩10分 電話：03-3941-3029]

主催者「トロイカ音楽事務所」 電話：03-3203-9070 FAX：03-3207-5909

ホームページ：<http://tokyo-troika.jp> メール：[k-asa@pp.iij4u.or.jp](mailto:k-asa@pp.iij4u.or.jp)

会員割引：自由席2000円 指定席2500円

2005年度の日本ロシア文学会総会・研究発表会のプレシンポジウムおよび関連企画は、10月7日（金）に行なわれます。総合テーマは「ロシア正教と日本」。

プレシンポジウムは、15時から17時まで、井深大記念ホール（総会と同会場）にて、パネラーと演題は上記の通りですが、最後にゲスト出演としてナターリヤ・グジー氏のバンドゥーラ弾き語りとお話「チェルノブイリの祈り」があります。

これを挟むかたちで、二つの企画を用意しております。まず、プレシンポジウムの前に13時より14時までニコライ堂の見学を企画しています。当日の13時から17時までには一般の見学に開放されている時間帯ですので、遅れて到着されても見学は可能ですが、13時から10分ほど簡単なガイドをしていただきますので、できれば13時までに直接ニコライ堂内にご参集下さい。なお、見学料として、300円が必要ですのでご了承下さい。また、事務局で事前におおよその見学者数を把握したいと存じますので、見学ご希望の方は総会・研究発表会の出席はがきの該当欄にてご一報いただければ幸いです。

つぎに、プレシンポジウムの後、日本ロシア文学会協賛の企画として、東京カテドラル（東京カテドラル聖マリア大聖堂において、東京トロイカ合唱団によるラフマニノフ「晩禱」の全曲演奏会（教会スラヴ語演奏）があります。これは日本ロシア文学会のためにとくに企画された演奏会ではなく、有料で一般公開されるものですが、日本ロシア文学会協賛企画として、会員は会員割引でお聴きいただけます（自由席2500円を2000円、指定席3000円を2500円）。

お聴きになりたい会員の方は、日本ロシア文学会会員であることを告げて、直接上記主催者にお問い合わせ下さい。

なお、演奏会会場は、総会・プレシンポジウム会場から直線距離では比較的近いのですが、懇親会会場に予定されているリーガロイヤルホテル東京からタクシーを利用されるのが便利かと思われます（約10分、運賃は1000円前後）。

早稲田大学（開催校） 伊東一郎

## 2005 年度日本ロシア文学会研究発表会

開会式 9:20～9:35

会場：A 会場（国際会議場第 1 会議室）

挨拶：日本ロシア文学会会長 川端香男里

### A 会場 国際会議場第 1 会議室

		タイトル	発表者	司会者
第 1 ブロック 10 月 8 日（土） 午前	[01]	9:35～10:05	[この枠の研究発表は行われません]	金沢美知子 相沢直樹
	[02]	10:10～10:40	1760-70 年代ロシアの頌詩作品と第一次対トルコ戦争	
	[03]	10:45～11:15	ジュコーフスキーの寓話	
	[04]	11:20～11:50	イヴァン・トゥルゲーネフの戯曲	
第 2 ブロック 10 月 8 日（土） 午後	[05]	13:00～13:30	ドストエフスキーの作品における＜罪の意識＞	望月恒子 鈴木淳一
	[06]	13:35～14:05	チュッチェフとヴェルシーロフ 「ロシアのヨーロッパ人」と郷愁	
	[07]	14:10～14:40	ПОСЛЕДНИЕ ЧТЕНИЯ НА ВИПЛЕ JEANNETTE	
第 3 ブロック 10 月 9 日（日） 午前	[08]	9:35～10:05	ホダセヴィチとバラトゥインスキー	鈴木正美 長谷見一雄
	[09]	10:10～10:40	法廷の歌姫 マンデリシターム 『第四の散文』の読解に向けて	
	[10]	10:45～11:15	ブルガーコフ研究の現在	
	[11]	11:20～11:50	シギズムンド・クルジジャンフスキイ 1924-25 年のモスクワオーケル ルクにおける言葉と記憶の問題	
第 4 ブロック 10 月 9 日（日） 午後	[12]	13:00～13:30	抒情詩の解体と再生 ヨシフ・プロツキー “Часть речи”	沼野充義 貝澤 哉
	[13]	13:35～14:05	プロツキーの＜帝国＞論 詩「ANNO DOMINI」における父性原理を 中心に	
	[14]	14:10～14:40	断片から物語へ ヴェネディクト・エロフェーエフ『ある奇人の目で見 たワシーレイ・ローザノフ』	

## B 会場 国際会議場第2会議室

## タイトル

## 発表者

## 司会者

第1ブロック 10月8日(土) 午前	[15]	9:35 ~ 10:05	ロシア語における2種類の下降イントネーション	五十嵐陽介	佐藤昭裕 米重文樹
	[16]	10:10 ~ 10:40	談話標識としての еще	村越律子	
	[17]	10:45 ~ 11:15	時制対立のないロシア語後続事象型補文におけるアスペクト分化を左右する条件 否定が関係した場合	Evseeva Elena Viktorovna (エブセー バ・エレナ・ビクトロ ブナ)	
	[18]	11:20 ~ 11:50	ロシア語とウクライナ語における反復の時間表現の対照研究	小川暁道	
第2ブロック 10月8日(土) 午後	[19]	13:00 ~ 13:30	形動詞の現れる位置(前位・後位)に関する一考察	嶋田敦子	佐藤純一 金田一真澄
	[20]	13:35 ~ 14:05	Предупреждение и устранение грамматических ошибок японских учащихся в речи на русском языке	Клочков Юрий (クロ チコフ、ユーリー)	
	[21]	14:10 ~ 14:40	К вопросу о происхождении и эволюции некоторых эпистолярных формул в берестяных грамотах	中澤敦夫	
第3ブロック 10月9日(日) 午前	[22]	9:35 ~ 10:05	Новые компьютерные технологии для социолингвистических исследований // New Computer technologies as a Tool for Sociolinguistic Research	Galina Nikiporets-Takigawa	鈴木 晶 中澤英彦
	[23]	10:10 ~ 10:40	三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳について	ゲトワ・エカテリーナ	
	[24]	10:45 ~ 11:15	戦争文学における女性兵士像について～「大祖国戦争」文学の中・短編から	佐藤亮太郎	
	[25]	11:20 ~ 11:50	カシヤーン・ゴレイゾフスキーのアヴァンギャルド・バレエ～『竜巻』を中心に～	村山久美子	
第4ブロック 10月9日(日) 午後	[26]	13:00 ~ 13:30	パフチンに抗うトゥイニャーノフ：文学のエボリューション	八木君人	桑野 隆 川端香男里
	[27]	13:35 ~ 14:05	シクロフスキーにおける再認の概念	野中進	
	[28]	14:10 ~ 14:40	文学論争としての文学の商業化～литература и словесность	近藤大介	

C 会場 国際会議場第3会議室

			タイトル	発表者	司会者
第1ブロック 10月8日(土) 午前	[29]	9:35~10:05	映画『トゥルクシブ』における煽動性の機能について	佐藤千登勢	大石雅彦 大平陽一
	[30]	10:10~10:40	ディアギレフと画家達	平野恵美子	
	[31]	10:45~11:15	モンタージュからデジタル・メディアへ 情報化社会におけるロシア・アヴァンギャルドの再評価	江村公	
	[32]	11:20~11:50	グリゴリー・チュフライ研究	前田恵	
第2ブロック 10月8日(土) 午後	[33]	13:00~13:30	モスクワのミュージカル	森田まり子	安村仁志 中村喜和
	[34]	13:35~14:05	はたして相手の言うことは分かったのか ラクスマン来航時の日露交渉過程	有泉和子	
	[35]	14:10~14:40	18世紀後半におけるロシア貴族のヨーロッパ修学旅行 パーヴェル・アレクサンドロヴッチ・ストローガノフの事例	小野寺歌子	
第3ブロック 10月9日(日) 午前	[36]	9:35~10:05	ダーシコヴァと『アカデミーロシア語辞典』編纂の社会的意義	中神美砂	佐々木照央 津久井定雄
	[37]	10:10~10:40	ドストエフスキーとロシアにおける火事のイメージ	越野剛	
	[38]	10:45~11:15	В. Я. Ерошенко и язык эсперанто: известность и забвение	Аникеев С. И.	
	[39]	11:20~11:50	Лингвострановедческий курс «Российские телевизионные новости — окно в русский мир»	Орлянская Татьяна Георгиевна	
第4ブロック 10月9日(日) 午後	[40]	13:00~13:30	«Медленное чтение» как синтез изучения языка, литературы и культуры	Маргарита Казакевич	坂内徳明 メーリニコワ
	[41]	13:35~14:05	中国黒龍江省遜克県アムール河沿岸のロシア族集落	塚田力	
	[42]	14:10~14:40	ソヴィエト政権初期聾教育システムと全ロシア聾協会の教育活動に関する一考察	白村直也	

研究発表会 会場案内 (いずれも 早稲田大学 国際会議場内)

開会式: 第1会議室(3階)

研究発表会 A会場: 第1会議室(3階) B会場: 第2会議室(3階) C会場: 第3会議室(3階)

各支部総会 北海道支部: 第2会議室(3階) 東北支部: 市島記念会議室(3階) 関東支部: 井深大記念ホール(1階)

中部支部: 第3会議室(3階) 関西支部: 第1会議室(3階) 西日本支部: 共同研究室〔6〕(4階)

理事会: 共同研究室〔7〕(4階)

定例総会: 井深大記念ホール(1階)

各種委員会(いずれも4階) 会誌編集委員会: 共同研究室〔2〕 学会賞選考委員会: 共同研究室〔3〕 広報委員会: 共同研究室〔4〕

国際交流委員会: 共同研究室〔5〕 ロシア語教育委員会: 共同研究室〔1〕

事務局: 共同研究室〔1〕 休憩室: 共同研究室〔6〕

## 研究発表要旨

「A-4」などの記号は、A 会場の第 4 ブロック（9 日午後）で行われることを示します。発表時間・司会者については、3~5 頁をご参照下さい。

[01] [この枠の研究発表は行われません]

[02] 1760-70 年代ロシアの頌詩作品と第一次対トルコ戦争「A-1」

鳥山祐介（東京大学 大学院生）

エカテリーナ二世の治世下におけるロシアとオスマン帝国との戦争は、クリミア領有や黒海制覇の契機をロシアに与えたが、同時に、コンスタンティノープルを首都とする東ローマ帝国の再建を目指す「ギリシア計画」と呼ばれる構想を温めていたエカテリーナ政権にとって、ある種の文化的象徴性を有するものでもあった。

本報告では、女帝の治世前半に行われた第一次対トルコ戦争（1768-74）を題材とする、ペトロフ、スマローコフ等の頌詩を取り上げ、その中で、マレルブなど西欧の頌詩における「東洋の制圧」「好戦性と平和の葛藤」といった伝統的テーマ、「崇高」の表象と結びつく描写の視覚性、そして古代ギリシア・ローマとロシアとの類似といった複数の要素が、同時代の政治的・社会的コンテクストとの絡み合いの中でどのように作用し合い、どのように「ロシア」の自己表象の形成に加担していったかを検討する。

[03] B. A. ジュコーフスキーの寓話「A-1」

岸本福子（早稲田大学 大学院生）

B. A. ジュコーフスキーは多くの寓話作品を書いているが、それらは「自由な翻訳作品」である。それには 1806 年にフロリアン、ラ・フォンテーヌの寓話から訳された一連の翻訳寓話がある他、1818 年にはレッシングの散文寓話から訳された 9 作品の寓話が、1833 年には同名のゲーテの寓話からの翻訳『ワシとハト』などがある。また 1809 年に書かれたジュコーフスキーの評論文『寓話およびクイロフの寓話について』の中では、「詩的寓話」の理想形としてラ・フォンテーヌの寓話が賛美され、性善説に基づいたユートピアの合一世界というジュコーフスキーの世界観が表明されている。これらの一連の翻訳寓話と論文、さらにそれに関連したスマローコフ、クニャジニン、И. И. ドミートリエフ、クイロフ等の数作品を検討し、ジュコーフスキーの提唱する新しい寓話について、そして彼の寓話論における理想的世界観とその作品世界における矛盾について考える。

[04] イヴァン・トゥルゲーネフの戯曲「A-1」

粕谷典子（早稲田大学 大学院生）

トゥルゲーネフの戯曲は、初期の詩作や『獵人日記』と並行して執筆された。完成作としては 10 篇が残っており、いずれも発表当初から評価の分かれる作品だったが、チャーホフにあたえた影響も指摘されている。これらの作品の価値を見直すためには、悲劇・喜劇・ヴォードヴィルなどと関連したジャンルの問題、他の短篇、中篇、長篇とは対照的な心理描写の問題、そして構成の問題と、さまざまな点で分析することが必要と思われる。それをおとて、トゥルゲーネフが評価の高かった『獵人日記』連作と並行して、あえて評価の芳しくなかった戯曲を書きつづけたのはなぜなのか、トゥルゲーネフの創作史のなかで戯曲はどのような意味を持つのかを考察していきたい。

[05] ドストエフスキーの作品における 罪の意識 「A-2」

木寺律子（大阪外国語大学 大学院生）

「罪」については古くからキリスト教の中で多く議論されてきたが、これは法律、倫理や精神分析の分野の中でも多く取り上げられる問題である。本発表では、すでに罪であると定められた明らかな犯罪行為そのものではなく、罪についての人間の意識・認識を「罪の意識」としてテーマとする。

19 世紀のロシアにおいて、自分が民衆から遊離していることを自覚していたインテリゲンツィアが民衆に対して罪の意識を持ち、知識を持つことへも罪の意識を感じていることが指摘されてきた。ドストエフスキーの作品には、西欧風の教育を受けた知識人の青年が、自己の力を発揮するに当たって苦悶するさまが多く描かれる。イヴァン・カラマーゾフやニコライ・スタヴローギンは自分が教唆したことについて罪の意識を感じている。作品に表れるこの「罪の意識」を考察する。

[06] チュッチェフとヴェルシーロフ 「ロシアのヨーロッパ人」と郷愁「A-2」

坂庭淳史（専修大学）

昨年刊行されたアナスターシア・ガーチェヴァ氏の著作『己の言葉がいかにか、私は知る由もない（ドストエフスキーとチュッチェフ）』は作家と詩人の思想を様々な面から検討しつつロシア文学史・思想史における二人の立場の近さを論じたもので、今後のチュッチェフ研究における重要な文献となるであろう。なかでも論議の独自性を感じさせるのは、小説『未成年』の登場人物とチュッチェフを比較した「チュッチェフとヴェルシーロフ（『ロシアのヨーロッパ人』の形象の源流について再考）」という節である。

チュッチェフとヴェルシーロフの形象に多くの共通部分があるのは、ガーチェヴァ氏が指摘するとおりだが、一方で看過できない差異もあるように思われる。本発表ではこの差異に着目し、また、ヴェルシーロフが自ら称している「ロシアのヨーロッパ人」について考えながら、ヨーロッパとロシアをめぐるチュッチェフの世界観の特徴を明らかにしていく。

[07] ПОСЛЕДНИЕ ЧТЕНИЯ НА ВИЛЛЕ JEANNETTE 「A-2」

Вечеслав Казакевич（富山大学）

Исследователям жизни и творчества И. А. Бунина его дневники 1939—1945 гг. давали, прежде всего, богатый биографический материал.

Попробуем взглянуть на эти дневники с новой точки зрения, выделив три проблемы:

1. феномен старости приложительно к Бунину
2. Бунин как читатель (В эти годы он перечитывает многие книги и высказывает свои мнения о них)
3. Бунин как литературный персонаж

[08] ホダセヴィチとバラトウインスキー  
「A-3」

三好俊介

ヴラジスラフ・ホダセヴィチ(1886-1939)には、「20世紀ロシア最大の詩人」(ナボコフ)という評価さえあるにもかかわらず、ソビエトでは長らく禁書だったこともあり、本格的な研究は多くない。一見古典的にもみえる彼の詩作品の新しさとは何だったのか。代表的詩集『重い豎琴』収録の作品を中心に、彼の先駆的存在の一人であるバラトウインスキーと対照しつつ、検討することとしたい。

[09] 法廷の歌姫 マンデリシターム『第四の散文』の読解に向けて「A-3」

斉藤毅(電通大学)

マンデリシタームの『第四の散文』(1930)は、彼が翻訳剽窃の嫌疑をかけられ、訴訟騒ぎにまで発展した、いわゆる「ティル・オイレンシュピーゲル事件」(1928)に際し、当時のソヴィエト文学体制に向けて放たれた攻撃文書であるが(発表はされなかった)、このテキストの執筆は、結果として、彼の詩作が5年の沈黙を経て、再開される契機となった。この文書は、パンフレットという体裁を取っているとはいえ、タイトルが明示するように、その本質からして文学的テキストであり、その理解のためには、読解という作業が求められる。本発表では、こうした観点から、『第四の散文』における諸形象、とりわけ「文学者=作家=もの書き」の形象、および「ユダヤ」という称号を与えられた詩人のあり方について検討し、最終的には、文学の中核に位置する、法と詩歌との関わりに迫りたい。

[10] ブルガーコフ研究の現在「A-3」

石原公道

1991年ブルガーコフ生誕100年が祝われた後、ブルガーコフ研究は新たな段階に入った。1995-2000年に10巻本全集(編者 В. Петёлин. 1989-90年の5巻本刊行以降の各種ヴァリエーションの集成)や2002年8巻本全集(編者 В. Лосев)が刊行されたが、テキストの問題は残る。エレナ等のブルガーコフの妻たちと関わりのない研究者の仕事が刊行され、戯曲『パトゥーム』が正面から取り上げられるようになった(1996年『芸術家ブルガーコフ』 В. Новиков)。また2003年『ミハイル・ブルガーコフ家系図』 Б. Мяков (ブルガーコフ家及び三人の妻に関わる全家系図とコメント)等が注目される。こういう状況で М. Чудакова による『巨匠とマルガリータ』豪華版も刊行されたが、最初期からのブルガーコフ研究家で在イスラエルの文献学者 Л. Яновска 『ミハイル・ブルガーコフ覚書』(2002年)を中心として、ブルガーコフ研究の現在について考えてみたい。

[11] シギズムンド・クルジジャンフスキイ  
1924-25年のモスクワオーケルルクにおける言葉と記憶の問題「A-3」

上田洋子(早稲田大学 大学院生)

キエフで活動していたシギズムンド・クルジジャンフスキイ(1887-1950)が、モスクワへ居を移したのは1922年のことである。以来、作家は街を隈なく歩き回り、さらに歴史博物館付属図書館で文献を調べるなど、モスクワを「親しく重要なテーマ」として研究する。その成果は、『モスクワの看板』(1924)、『消印:モスクワ』(2000)、『その一瞬のコレクション』(1925)という、一連のオーケルルクとして発表されることになる。

これらの作品の特徴として、大都市モスクワの新旧交替のダイナミズムを描きつつも、変化のエネルギの基

盤としての《過去》への注目を読者に促している点が挙げられる。時間軸を遡る起点となる、《現在》目に見えている現象の中で大きな位置を占めているのが、言葉、名前、文字である。2005年度の学会では、これらのモスクワオーケルルクを対象に、クルジジャンフスキイ作品における記憶のトポスとしての言葉の問題を分析する。

[12] 抒情詩の解体と再生 ヨシフ・ブロツキ  
ー "Часть речи" 「A-4」

長谷川麻子(早稲田大学 大学院生)

ロシア詩は現代においても抒情詩の流れを追及しているように思われる。20世紀を代表する詩人のひとりブロツキの作品も、様々な方法を用いて抒情詩の解体をめざしているかのようであり、実際のところはそれはつねに抒情詩をめぐる言葉の積み重ねにほかならない。

そうした作品のなかから今回取り上げる予定の"Часть речи"は、ブロツキの代表作のひとつとして評価され、日本語の翻訳も活字になっている。この題名を「品詞」と訳してみるだけでは作品内部を推し量ることはできないだろう。しかしそれを「ことばの一部」としてみたとき、読者は抒情詩としての作品の入り口に立つことになる。詩という言葉をあつかう技法によって巧みにことばのなかに埋め込まれ編み込まれてきたものを、逆に掘り出し解きほぐすことで新たな詩を構築する試みとして作品を検討する。

[13] ブロツキの<帝国>論 詩「ANNO DOMINI」における父性原理を中心に  
「A-4」

竹内恵子(東京大学 大学院生)

ヨシフ・ブロツキの詩学において頻出する特異なトポスとしての<帝国>の意義を多角的に検証する。ブロツキは現代詩人でありながら、古代ギリシア・ローマ文化を殊更に標榜することで知られており、その生涯を通じて古典古代のモチーフを追及し続けたといっても過言ではない。にも関わらず、<帝国>という語彙そのものが使用されているのは、彼のコーパス全体において、1965年から1980年という特定の年代に限られている。したがって、本発表では、1968年の詩「ANNO DOMINI」を中心として、これまで詳細な検討がなされてこなかったブロツキ独自の<帝国>の問題を、テキストの構造分析を通して明らかにしたい。更に、<帝国>における父性原理およびオイディプス・コンプレックスといった、従来のブロツキ研究では等閑にされがちな精神分析批評の観点にも踏み込む予定である。

[14] 断片から物語へ ヴェネディクト・エロフエーフ『ある奇人の目を見たワシーリイ・ローザノフ』「A-4」

神岡理恵子(早稲田大学 大学院生)

ヴェネディクト・エロフエーフの散文作品『ある奇人の目を見たワシーリイ・ローザノフ』(1973)は、サミズダートの雑誌『ヴェーチェ』(«Веч»)に寄せて書かれたものである。恋人にふられて自殺を考えていた主人公は、ソヴィエト時代にもっともタブーであった作家・思想家の一人であるワシーリイ・ローザノフの著作を読んで彼に共感し、救われる。断片的な特徴をもつローザノフのテキスト 主に『孤独な者』(1912)、『落葉』(1913-1915)を中心に からふんだんに引用が行われ、主人公は時にそれらの引用句と、また読んでいた本の中から飛び出したローザノフ本人と対話しながら、体制批判を行ったり様々な思いを吐露する。エロフエーフがローザノフのテキストをどのように用い、独自の物語をいかに組み立てていったかを考察する。

[15] ロシア語における 2 種類の下降イントネーション「B-1」

五十嵐陽介(理化学研究所)

ロシア語には、基本周波数(F0)がストレス音節で下降し、文末まで低く続くイントネーションパターン(下降ボタン)が存在する。この下降ボタンに関して本研究が注目するのは、ストレス音節に対する F0 下降タイミングがかなり顕著に変動することがあるという事実である。具体的に言えば、下降開始点にあたる F0 ピークがストレス音節の直前に生じる場合と、音節の中心付近に生じる場合がある。下降のタイミングが異なるこれら 2 つの F0 曲線は、1) 単一のボタンが変動した結果に過ぎないという解釈と、2) 異なる 2 種類のボタンの実現であるという解釈が可能である。

本研究は、“imitation task”と呼ばれる音声知覚と音声産出を組み合わせた手法を用いて、ロシア語には F0 下降のタイミングの差異により範疇的に区別できる 2 種類の下降ボタンが存在するとする仮説の妥当性を検証する。実験結果はこの仮説の妥当性を示唆するものとなった。

[16] 談話標識としての еще「B-1」

村越律子(上智大学)

談話とは、一つの文より長いことばの連続を指し、談話がどのように作られているかを示す語や表現を談話標識(discourse markers)という。ロシア語では不変化辞(частицы)が典型的な談話標識である。談話標識には、

文と文を関係づける構造的意味(structural or text-based meaning)と、述べられていることや話し相手に対する話し手の態度を表す語用論的意味(pragmatic or speaker-based meaning)がある。発表では、不変化辞の一つ еще を取り上げ、それが文レベルの命題の意味からどのように発展し、上の二つの意味がどのように機能しているかについて述べる。例:

— Постриги меня немного, видишь — оброс.

— Стриги его еще! Не можешь в парикмахерскую сбежать?

発表内容は еще に関する詳細な分析ではなく、談話研究に対するアプローチと位置づけている。

[17] 時制対立のないロシア語後続事象型補文におけるアスペクト分化を左右する条件否定が関係した場合「B-1」

Evseeva Elena Viktorovna(エブセーバ・エレナ・ピクトロブナ)(京都大学 大学院生)

従来、否定が関係した場合、時制対立のない環境における動詞の体選択は事象の限界性によってだけでは説明できず“望ましくない”事象の“突発的”生起への危惧をあらわす場合、完了体が選択される場合がある(かりに制御性による体選択制約の顕現と呼ぶ)といった点についてよく指摘が行われる。しかしそのような体選択が否定文全般について行われるわけではない。本研究では、主語/目的語制御動詞がとる後続事象型補文において、当該制約がどういう範囲で適用されるかを整理する。その結果、従来の研究で傾向や可能性の指摘に留まっていた制約の適用条件について、i) 主文動詞のタイプ(主語制御動詞か目的語制御動詞か)、ii) 主文動詞の体(不完了体か完了体か)、iii) 否定辞の位置(補文否定か主文否定か)という違いによって、当該の制約の働きが対立的に現れる場合、厳格に現れる場合、そしてその働きが中和する場合があることを詳しく示す。

[18] ロシア語とウクライナ語における反復の時間表現の対照研究「B-1」

小川暁道(東京外国語大学 大学院生)

ウクライナ語では接頭辞 шо+生格と接頭辞 шо+対格の形式がある。時間の意味を持つ名詞に接頭辞 шо+が付加され、時間の反復を表す。

ウクライナ語ではこれら二つの形式によって表される二つの反復の性質があり、これらの対応にはゆれがある。以前の調査では、接頭辞 шо+生格は単純反復を、接頭辞 шо+対格は漸次的変化を表す傾向が見られた。単純反復・漸次的変化とは、前者は質的・量的変化を伴わない動作の反復、後者は動作の過程における変化を伴う反復である。

本発表ではロシア語のテキストにおいて実際に使用されている反復の時間表現を調査し、ロシア語の反復の時間表現における形式と意味の対応をウクライナ語のそれと対照し、記述することが本発表の目的である。また、文中における反復の時間表現の状況語以外にも動詞の語彙の意味や副詞などの反復の指標についても注目する。

[19] 形動詞の現れる位置(前位・後位)に関する一考察「B-2」

嶋田敦子(筑波大学 大学院生)

現代ロシア語における形動詞、特に今回は能動形動詞現在に絞って、以下の視点からその特徴を明らかにしたい。

「形動詞は(補語などのある時は、それと共に)名詞の前にも後ろにも位置し得る(例えば: читающий книгу ученик 又は ученик, читающий книгу)」というのが一般的な形動詞の現れる位置に関する記述となっている。

英語の場合、現在分詞の前位・後位の問題には、「進行相の読み」・「分類的機能の有無」等が関与することが明らかにされているが、語順の比較的ゆるやかなロシア語においても実際には前位・後位の間には何らかの差異のあることが予想され、仮にそうであるならば、一体どういった要素が関与するのかについて考えていきたい。形容詞との比較も加え、問題に迫りたい。

[20] Предупреждение и устранение грамматических ошибок японских учащихся в речи на русском языке「B-2」

Клочков Юрий(クロチコフ、ユーリー)(駒沢大学)

Предупреждение и устранение ошибок представляет собой работу над зафиксированными типичными ошибками при помощи доступных для методики средств, поэтому для предупреждения и устранения ошибок используются преимущественно те средства и приемы, которые разработаны для ознакомления с новым материалом и выработки навыков его употребления в речи.

На начальном этапе изучения русского языка японские учащиеся, попадая в ситуацию учебного общения на русском языке, не всегда чувствуют себя уверенно. Они довольно часто переживают психологический стресс — определенную эмоциональную напряженность. Это в значительной мере способствует нарушениям в их речи, пассивности, слишком долгому обдумыванию ответа, путанице мыслей, оговоркам и т. п.

Работа по предупреждению ошибок на уроке тесно связана с корректирующей деятельностью преподавателя, исправлением и устранением ошибок. В процессе выполнения тренировочных упражнений коррекция проводится жестко, широко используются корректирующие приемы например, «подсказывающие» вопросы, инструкции, схематические и смысловые опоры.



[21] К вопросу о происхождении и эволюции некоторых эпистолярных формул в берестяных грамотах 「B-2」  
中澤敦夫 (富山大学)

В настоящее время мы располагаем приблизительно тысячей единиц берестяных грамот X—XV вв. новгородского и другого происхождения, большая часть которых связана с частной перепиской. Как уже отмечено некоторыми исследователями, в берестяных письмах довольно часто встречаются такие эпистолярные адресные формулы, как *от X к Y, поклояние от X к Y, поклонь от X к Y, челобитье от X к Y* и другие. Очень интересно отметить, что каждая формула как будто имеет свой “сезон”: одна формула использовалась преимущественно в одно время, потом выходила из употребления, сменяясь другой формулой.

Докладчик попытается охарактеризовать основные тенденции этого явления, привлекая новые материалы, найденные за последние годы; попробует выяснить причину возникновения новых формул и их смен на основании дипломатики, при помощи историко-лексикографического, источниковедческого анализа берестяных писем.

[22] Новые компьютерные технологии для социолингвистических исследований // New Computer technologies as a Tool for Sociolinguistic Research 「B-3」  
Galina Nikiporets-Takigawa (東京外国語大学)

Предметом моего научного интереса является речевая агрессия в ЯСМИ.

Я исследовала динамику присутствия ряда слов «агрессивной семантики» в ЯСМИ на протяжении последних десяти лет (31.12.1993—31.12.2004) при помощи системы Integrum www.integrum.com

Колебания графиков отражают актуализацию заданных лексем и изменение их частотности, которые происходят под влиянием совокупности факторов.

1. Реальных событий политической и экономической жизни.

2. Социальных процессов, определяющих тематику в СМИ и социальный запрос.

3. Стремления СМИ к наибольшей суггестивности.

4. Социолингвистических факторов.

Исследование последних я предприняла на примере лексемы *агрессивный*.

Анализ продемонстрировал, что семантика слова расширяется, изменяется его лексическая сочетаемость, функционально-стилистическая принадлежность, его частотность возрастает.

Причины — снижение языковой компетенции и редукция индивидуального словаря, языковая мода на иностранные слова при неточном понимании заимствуемого слова.

Возрастание частотности слова *агрессивный* приводит к увеличению пропорции слов «агрессивной семантики» в ЯСМИ. СМИ обладают мощнейшим средством тиражирования. Многократное повторение слова в различной интерпретации способствует его усвоению и закреплению в сознании, а также является способом манипуляции психическим состоянием общества.

[23] 三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳について「B-3」  
グトワ・エカテリーナ

三島由紀夫の『金閣寺』の原文と Григорий Чхартишвили によって行なわれたロシア語訳 (『Золотой Храм』) を比較し、文体論的な研究を試みた。具体的には次の問題を中心に検討した。

1. レアリアや固有名詞の翻訳法とそれにつながる日本的な民族特色の反映。翻訳法の選択はレアリア、固有名詞の特質、そして文脈の中での役割、文体的な機能によって異なっている。

2. 登場人物の言葉の文体、その翻訳法、その表現力の伝え方。翻訳者はそれぞれの登場人物の言葉の特徴を現すためにどういう手段を使って、どういった効果が生まれたのかを検討した。男性と女性の言葉の翻訳法、方言の翻訳法の問題も取り上げた。

3. 比喩の翻訳法を中心に分析をした。日本語とロシア語の文法、語彙の意味量、語の結合力の違いによって、また日本の読者とロシアの読者の文化的、歴史的な認識、経験の違いによって、比喩の翻訳法が異なる。

[24] 戦争文学における女性兵士像について ~ 「大祖国戦争」文学の中・短編から「B-3」  
佐藤亮太郎 (北海道大学 大学院生)

1941-45年の「大祖国戦争」を題材とした文学作品を、戦争を軸としたロシア人(ソ連国民)の自己認識の問いの表現手段として、また、戦争という歴史的経験に対する大衆の「神話」を形成してきた力として捉える立場に立って、戦争文学作品に登場する女性兵士像に注目する。「大祖国戦争」において広範な戦争参加をした「女性兵士」という歴史的現実に対して、文学はどのような物語で、どのような形象で表現したのか、そして、その「女性兵士」の形象はどのような特徴を持っているかを、主に中・短編を中心とした戦争文学作品で明らかにする。多くの戦争文学の担い手であった男性の作家は、自らとは異なる性である女性兵士を描く際には特別のイメージと役割を与えており、作家の自画像と重なる男性兵士像と異なっている。女性像に対する作家の無意識の現れる場として戦争文学を捉え、その中で形作られてきた女性兵士のイメージと役割を明らかにする。

[25] カシャーン・ゴレイゾフスキーのアヴァンギャルド・バレエ ~ 『竜巻』を中心に ~ 「B-3」  
村山久美子 (早稲田大学)

ゴレイゾフスキーのアヴァンギャルド・バレエの研究として、昨年本学会で報告した1925年初演バレエ『美しきヨセフ』に続いて、今回は1927年にモスクワのポリシヨイ・劇場支部「実験劇場」で初演されたバレエ『竜巻』を中心に取り上げる。『竜巻』は、アカデミー劇場での革命をテーマとした数少ないバレエの一つであり、ここには、それ以前までのエストラダでのゴレイゾフスキーの、メイエルホリドほかのアヴァンギャルドの芸術家とのコラボレーションによる作品の痕跡が見られる。『竜巻』を分析しながら、ダンスのアヴァンギャルド運動の旗手としてのゴレイゾフスキーの様々な実験の意義を検討し、かつ、1920年代のアカデミー・バレエ劇場が抱えていた問題、伝統的バレエの方向性について考究したい。

[26] パフチンに抗うトゥイニャーノフ：文学のエボリューション「B-4」  
八木君人 (早稲田大学 大学院生)

メドヴェージェフノフ/パフチン『文芸学における形式的方法』におけるフォルマリズム批判、特にトゥイニャーノフの文学史観に対する批判を梃子にしながら、『文学のエ

ボリウーション』と『文学的ファクト』を新たに読解するかたちで、トウニャーノフの文学史について考えます。これらトウニャーノフのテキストは、多くの論者によって賛美されているものの、主題的に論じられることは多くありません。

現在、源流としてフォルマリズムを持つ構造主義が乗り越えられたといわれるからこそ、フォルマリズムを見直す必要があると考えます。われわれは、構造主義を通してフォルマリズムを眺めることに慣れすぎています。その意味で、大いにヤコブソンの「文学研究及び言語研究の諸問題」に収まらない部分に焦点を当てたいと考えています。「歴史が構造か」という二者択一ではない地点で、非目的論的なトウニャーノフの文学史を提起することがささやかな目的です。

## [27] シクロフスキーにおける再認の概念「B-4」

野中進（埼玉大学）

シクロフスキーの理論的著作を読んでいると、最初に言われていたはずのことと反対の主張に辿りついてしまうことがしばしばある。これは彼独特の逆説の効果を別にすれば、議論のうちに何らかの理論的両義性が存在するからである。彼の異化理論を支える「直視」と「再認」の対比を取り上げよう。『手法としての芸術』では「再認」から「直視」への移行こそが芸術の課題だと主張される。だがあるものを「すでに見たことのある何か」として捉える再認のはたらきがなければ、文学を読む行為自体が成り立たないことは明らかである。そしてシクロフスキーの議論もそのような流れを辿ったように思われる。1930年代以降の著作で彼はくりかえし再認の概念に立ち戻っている。その作業のうちに、文学的モダニズムの自己検証の一例を見ることが可能だろう。また、文学的モダニズムと社会主義リアリズムの対峙の諸様相という課題に接続する契機が得られるかもしれない。

## [28] 文学論争としての文学の商業化 ~ литература と словесность 「B-4」

近藤大介（一橋大学 大学院生）

本発表は1820年代後半から1830年代にかけての文学の商業化を文学論争として捉えることを目的としている。19世紀のこの時期はロシア文学史上、詩から散文への移行期であり、また同時に文学が社会的職業であるという認識が作家たちの間に浸透していった時期でもある。しかしロシアにおける文学の商業化は社会が発展・成熟する過程に付随して行われたと言うよりは、ブルガーリン、センコフスキーなどのジャーナリストたちがサロン的な文学空間に対して自分たちの文学コミュニティーを確保するために論争の手段として利用していた面が強い。文学の商業化を巡る論争において<литература>と<словесность>という「文学」を指す二つの語に注目し、これらの言葉が担わされていた意味の差異から職業的文学とサロン文学との対立を読み取っていく。

## [29] 映画『トゥルクシブ』における煽動性の機能について「C-1」

佐藤千登勢（慶応義塾大学）

映画『トゥルクシブ』（ヴィクトル・トゥーリン監督、1929）は、トゥルクメニスタンとシベリアを結ぶトゥルクシブ鉄道建設のさなかに、労働者の意欲を高め、一致団結させることを目的として製作、公開される。事実、この作品に感動した労働者たちは1930年の完成より半年も早く鉄道建設を実現させた。当時の、「社会主義建設の現実からの芸術（文学）の立ち遅れ」の問題を解決する媒体としての映画の力を呈示した。だが、この作品には、当時の煽動性をもつ映画に特徴的な「群集、抑圧者と被抑圧者の対立、革命の図式」といった要素はことごとく欠如している。ここには、トゥルクメニスタンとシベリアの地理や産業や生活を素材とした記録フィルムが対置されつつ編集されているばかりだ。

本報告では、この、一見静態的な作品『トゥルクシブ』に潜在する煽動能力を一般的なドキュメンタリー映画と劇映画の要素を再確認し、またこれを踏まえて、検討していく。

## [30] ディアギレフと画家達「C-1」

平野恵美子（東京大学 大学院生）

セルゲイ・ディアギレフとベヌア画家達は、雑誌 Мир Искусства（1898-1904）の発行、美術展覧会やロシア音楽祭の開催等を経て、1900年、バレエ・リュスの西欧初公演を行った。ベヌアやバクストといった画家達はバレエ作品の創造に大きく関わったが、これら一流の画家達の芸術的理想は、どのようにバレエという三次元的な作品の中で表現されたのか、本人らの記述や西欧での批評の分析もまじえて考察する。特に19世紀末から20世紀初めにかけて、「ロシア的なもの」は、芸術の様々な分野の主要モチーフであったが、このロシア的主题に対する画家達のスタンスは、Мир Искусства からバレエ・リュスへ、ロシアから西欧へという流れの中でどのように変遷したのか、検討したい。

## [31] モンタージュからデジタル・メディアへ 情報化社会におけるロシア・アヴァンギャルドの再評価 「C-1」

江村公

本発表では、ロシアにおけるフォト・モンタージュの発生を絵画的な造形性の克服としてとらえ、その手法が映像メディアにおいてどのように展開されたのかを考察する。モンタージュは、間もなくヴェルトフやエイゼンシュテインによって用いられ、その後の視覚メディアの展開に大きな影響を与えることになった。さらに、こうした革新的な手法が現在のデジタル・メディアに、どのような足跡を残しているのかを検討し、その意義を明らかにする。

当時の芸術とテクノロジーをめぐる議論は、狭義の意味での視覚メディアの技法だけにとどまらない。ロシア・アヴァンギャルドはテクノロジーを盲信したと批判されることもあったが、近年の論考では現代の情報化社会において、社会における技術のあり方に関する、その先駆性を積極的に評価するものも出てきている。それらを踏まえて、当時の議論の多様性を示し、そのアクチュアリティを示唆することを試みる。

## [32] グリゴリー・チュフライ研究「C-1」

前田恵（大阪大学 大学院生）

本発表では、ロシア・ソ連映画監督 G. チュフライ Григорий Чухрай（1921 - 2001）を作品、および、その人物像から検証する。カンヌ国際映画祭特別賞を受賞した『誓いの休暇』*Баллада о солдате*（1959）で知られるチュフライは、生涯で、物語映画6作品とドキュメンタリー映画3本を監督した。チュフライは、「雪どけ」時代を迎えた映画界の復興の礎を築いたと評価され、ソ連映画界にとって重要な監督であるが、いまだ体系的な研究は行われていない。そこで、本報告では、チュフライ監督作品の作品分析とその人物像を考察する。作品分析では、全作品の主題、モチーフの傾向、および、その表現方法に主眼を置いて検証し、人物像については、彼自身による2冊の自伝や関係者の発言をもとに考察するが、特に、スターリングラード攻防戦に従軍した体験がどのように作品に反映しているのかについて掘り下げたい。

[33] モスクワのミュージカル「C-2」

森田まり子（早稲田大学 大学院生）

ロシアに限らず、イギリスを除くヨーロッパではなかなか根づくことのなかったミュージカルが、近年フランス語圏やドイツ語圏などでオリジナル作品が次々と上演され、勢いを増しつつある。モスクワでは2002年に初演された《ノートルダム・ド・パリ》を皮切りにミュージカル・ブームが起こった。しかしモスクワではヒットする作品とそうでない作品の落差が激しく、なかなか舞台のジャンルとしての地位を確立するには至っていない。本発表では、ここ数年のモスクワでのミュージカルの上演状況を分析し、モスクワで受容されているミュージカルの傾向や特徴を探りたい。

[34] はたして相手の言うことは分かったのか  
ラクスマン来航時の日露交渉過程

「C-2」

有泉和子（東京大学）

寛政四年（1792）に来航したラクスマン使節の対日交渉のありさまを日露両国の史料をもとに考える。

松平定信を首班とする日本政府は、当時既に貿易許可をも視野に入れ、内々では使節にその意向を洩らしており、また使節の主文書とも言えるピーリの書翰をも表向き受け取りを拒否しながら密かに受け取っている。こうした日本の態度をロシア側がどのように理解したかを前提に、両国の意思の疎通はどの程度なされたはずのものなのか、そもそも何語であったのか、通訳・翻訳の問題も含め検討する。

定信の手留、光太夫のロシア語能力に対する当時の専門家評価、使節の根室越冬時にもとに過ごしたため「ロシア語が少し分る」日本人、ラクスマン書翰日本語訳文の原文とはおよそ意味の違う不正確さと日本政府の無視、日本の正式通達書である論書の翻訳過程、そのロシア語訳文である現存のロシア宛文書は寛政当時のものではなく、後の文化十年（1813）にゴルヴニン等が訳し持ち帰ったものである可能性等が検討課題となる。

[35] 18世紀後半におけるロシア貴族のヨーロッパ修学旅行 パーヴェル・アレクサンドロ  
ヴッチ・ストローガノフの事例 「C-2」

小野寺歌子（京都大学 大学院生）

17世紀にはヨーロッパの一边境国にすぎなかったロシアが大国へと変貌を遂げた一因として、政治・経済・文化の諸分野においてリーダーシップをとった貴族が18世紀の間に蓄積したヨーロッパ的教育体験があげられる。すなわち、子弟教育においては外国人教師による家庭教育が貴族の主要な教育形態として定着し、とりわけ貴族上層では教育を「仕上げる」ためにヨーロッパ旅行へ送り出したのである。では、このヨーロッパ修学旅行はどのような教育体験の場となったのであろうか。本報告では、アレクサンドル一世治世初期「非公式委員会」のメンバーとして内政改革に取り組み、祖国戦争では数々の武功を立てた軍人でもあったP・A・ストローガノフ（1772-1817）の事例を取り上げ、教養教育、家督相続者のための教育、そして国際感覚形成の理念と実態を分析の軸にしなから、ヨーロッパ修学旅行における貴族の成長プロセスを検証したい。

[36] ダーシコヴァと『アカデミーロシア語辞典』編纂の社会的意義「C-3」

中神美砂（東京外国語大学 大学院生）

女性として初めて科学アカデミー院長などの公職に就いたE.P. ダーシコヴァは、西欧化を推進する18世紀ロシアの精神性を体現する人物である。デイドロヤアダ

ム・スミスなど海外の啓蒙家や学者とも親しく交わり、その深い教養と国際感覚は西欧にも広く知れ渡っていた。西欧文化を盲信せず、それを鋭く観察し、批判する目をもっていた彼女は、豊かな西欧体験を礎に、ロシア文化の保持を訴え、西欧を越えた独自の啓蒙思想を発展させようと試みた。ダーシコヴァは、こうした目的から、フォンヴィージンやデルジャーヴィンら当時の一流の知識人を集めて『アカデミーロシア語辞典』を編纂し、その作業をとおして、ロシアの独自性や独創性を表現する最も有効的な手がかりとしての「言葉」の持つ意味を若い貴族や知識人に認識させ、国民意識の高揚をめざすことになった。本報告では、現代ロシアでも再評価の気運の強いそうした彼女の足跡を具体例に即して考察する。

[37] ドストエフスキーとロシアにおける火事のイメージ「C-3」

越野剛

ドストエフスキーにおける火事のイメージの複雑な両義性と文化史的背景を明らかにしたい。小説『悪霊』のクライマックスで描かれる火事は、1862年にペテルブルグで起きた連続放火事件を念頭に置いていることはよく知られている。社会秩序の転覆を図る革命派の「悪鬼」どもの放つ地獄の火、社会悪の象徴としての火事のイメージが見てとれる一方で、登場人物の一人レンブケの「燃えているのは人々の頭の中だ」という台詞にあるように、人間の内面の悪、病気のイメージとも結びついている。後者はドストエフスキーの持病であるてんかんとも無関係ではない。

発表では『悪霊』分析の他に、『プロハルチン氏』における火事の描写と主人公の英雄崇拜の問題、そして1812年のモスクワ大火のイメージとの関連、ウメツカヤ事件（未成年による放火）の『白痴』や『未成年』などの創作への影響などを主に取り上げる予定である。

[38] В. Я. Ерошенко и язык эсперанто: известность и забвение「C-3」

Аникеев С. И. (ロシア極東大学函館校)

Из биографии В. Я. Ерошенко известно, что язык эсперанто он изучил в Москве в возрасте 22 лет, работая в оркестре слепых.

В 1912 г. он, пользуясь «эсперанто-эстафетой», совершил первое свое заграничное путешествие в Англию.

В 1914 году эсперанто помогает В. Ерошенко попасть в Японию. Здесь общественная и литературная деятельность приносят ему имя «русского слепого поэта».

После высылки из Японии в 1921 г. В. Ерошенко стал известным и в Китае, благодаря его дружбе с Лу Синем.

В Россию известный в Азии писатель вернулся в 1924 г., где и мер 1952 г. в полной безвестности и забвении. Какова роль эсперанто в этом контексте?

[39] Лингвострановедческий курс «Российские телевизионные новости — окно в русский мир»「C-3」

Орлянская Татьяна Георгиевна (北海道大学)

Актуальность вопросов взаимодействия языка и культуры в последнее время приобрела особое значение по целому ряду причин. Глобализация, миграция народов, исчезновение ряда государственных границ и осознание важности диалога культур привело к качественным изменениям и в преподавании иностранных языков. Всё больше внимания уделяется изучению иностранного языка в коммуникативном плане.

Из методических задач обучения языку как средству общения вытекает необходимость

リンゴストロノヴェドチエスキエ ナシチエニエ ユチブノ プロセッサ。 Для успешного общения на иностранном языке важно изучение мира носителей изучаемого языка и культуры в широком этнографическом смысле。

Телевидение является одним из наиболее влиятельных источников лингвострановедческой информации, а также средством отражения социокультурной действительности народа. С культурологической точки зрения, российское телевидение представляет собой своеобразное окно в русский мир; с лингвистической точки зрения, телевидение — это модель речевого общения разных социальных, территориальных, профессиональных и возрастных групп。

Разработанный мною и проводимый в Хоккайдском университете лингвострановедческий курс «Российские телевизионные носители — окно в русский мир» призван формировать лингвистическую, культурологическую и коммуникативную компетенцию учащихся。

#### [40] «Медленное чтение» как синтез изучения языка, литературы и культуры 「C-4」

Маргарита Казакевич

«Медленное чтение» (термин М. О. Гершензона) — сейчас отчасти позабытый метод глубокого филологического проникновения в художественное произведение с целью наиболее полного и точного понимания авторского смысла. Метод подразумевает скрупулезный анализ разных уровней художественного текста: грамматического, семантического, стилистического, анализ исторического, этнографического и биографического фона。

В докладе будет обоснована полезность «медленного чтения» при обучении русскому языку, литературе и культуре. По мнению автора, это наиболее верный путь для знакомства с русской языковой картиной мира, способ развития вторичной языковой интуиции («чувства языка»), побуждение к языковой рефлексии. При этом у студентов происходит колоссальное расширение и пассивного, и активного словаря, повышается уровень всех коммуникативных способностей。

Выводы автора основываются на опыте подобного чтения (7 лет, в группах японских взрослых учащихся) и анкетировании участников семинара。

#### [41] 中国黒龍江省遜克県アムール河沿岸のロシア族集落 「C-4」

塚田力 (北海道大学 大学院生)

中国東北部の黒龍江省のアムール河沿岸に位置する遜克県边疆鎮边疆村には、現在も数百名のロシア族住民が居住しつづけている。

彼らの多数は、ロシア革命後の混乱期、隣接するロシア連邦のアムール州 (主として対岸のボヤルコヴォ村) から移住してきたコサック出身の女性たちと、山東省出身の漢族男性たちの末裔である。

現時点において、ロシア国籍者、無国籍者なども少数いるが、大多数は中国公民である。

漢民族との通婚を通じて、彼らの同化が進んでいるが、年長者はロシア語話者であり、方言・生活習慣などに今なおロシア文化を色濃く残している。

この発表では、彼らの移住後の、満州国統治時代、革命後の集団化・文化大革命期などに触れつつ、現在の彼らの文化および宗教生活について現地での調査などを踏まえた上で紹介したい。

#### [42] ソヴィエト政権初期聾教育システムと全ロシア聾協会の教育活動に関する一考察 「C-4」

白村直也 (東京外国語大学 大学院生)

当該分野の主な先行研究 [例えばア・イ・ジャチコフ (1974) 「ソビエト特殊教育史」(学術資料刊行会) が挙げられる] は、1920年代中・後期ソヴィエト聾教育システムを記述する際に、3歳から8歳までの就学前教育、そしてその後の8歳から16歳までの通学・寄宿制学校までで留めている。従って、その後の16歳以降の継続的教育システムの存在に疑問が提示されるのは当然のことである。

そのような問題意識に対して、本報告においては全ロシア聾協会の教育活動という視点を提示した。つまり、全ロシア聾協会の教育活動を通じて当該時期の聾教育システムを捉え直し、記述することを試みた。

その試みから得られた成果は次の点にある。つまり、当該時期の聾教育システムに関して、先行研究に記されている16歳までの教育システムに付加する形で、その後の継続的教育システム (労農予備校、そして高等教育機関への進学) の存在が確認された。その継続的教育システムの創造は、協会の一連の教育活動がもたらしたものと考えられる、の2点である。

### 懇親会のご案内

日時：10月8日(土) 18:30より

会場：リーガロイヤルホテル東京  
2階 ダイアモンドの間

会場は早稲田大学国際会議場から徒歩5分ほどの場所です。別図(16頁)をご参照下さい。

会費：8000円(予定)

大学院生には特別会費の設定を予定しています。ふるってご参加下さい。

参加ご希望の方は同封のはがきでお知らせ下さい。

## 2. 7月理事会関連事項

7月の理事会は、7月23日(土)に早稲田大学戸山キャンパス第1会議室で開催されました。主な報告事項および審議事項は以下の通りです。

2005年度総会・研究発表会のスケジュールが決定された。

ロシア語教育委員会が2005年度総会より発足する運びとなった。

日本ロシア文学会の会長選挙実施に伴い、選挙管理委員会が設置されることとなった。

## 3. 学会賞決定

7月23日におこなわれた日本ロシア文学会学会賞選考委員会で、第2回ロシア文学会賞の受賞者が、以下の2名に決定しました(受賞論文は会誌36号に掲載のものです)。授賞式は、10月8日の総会時に行われます。詳しくは会誌第37号をご覧ください。

乗松亨平  
五十嵐陽介

## 4. 会員異動

入会(2005年7月理事会承認)

〔氏名(所属/支部)専攻分野(推薦者)〕

Evseeva, Elena(京都大学/関西)言語学(三谷恵子、佐藤昭裕)

バイビコフ、エレナ(京都大学 大学院生/関西)現代文明論(堀江新二、イリーナ、メリーニコワ)

今仁直人(一橋大学 大学院生/関東)ロシア思想史(長縄光男、御子柴道夫)

グトワ、エカテリーナ(関東)ロシア語学、翻訳論(長谷見一雄、沼野充義)

白村直也(東京外国語大学 大学院生/関東)ソヴィエト教育学(亀山郁夫、高橋清治)

退会(2005年度5月理事会承認)

藤井一行  
丹辺文彦

休会(2005年度5月理事会承認)

藤田和良(2005年9月より)

逝去(謹んでご冥福をお祈り申し上げます)

前川 漸  
安田泰明  
高山 旭

## 5. 会誌編集委員会より

学会誌「ロシア語ロシア文学研究」次号(第38号 2006年10月刊行予定)への投稿申し込みは、本年11月末日が締め切りです。A4用紙1枚(1000字程度)の論文要旨を、事務局宛にご郵送ください。申し込みの論文要旨の様式は自由ですが、要旨のほかに、氏名・住所(連絡先)・電話・FAX・メールアドレスを記した別紙を必ず添えてください。海外在住などの、やむをえない場合に限り、FAX、メールなどでの申し込みが可能です。この投稿申し込みは、今年度の学会報告をされたかどうかに関係なく、すべての投稿希望者に必要です。論文以外の原稿(書評、学会展望など)の投稿も歓迎します。掲載される論文等は、すべて投稿審査を受けることとなります。投稿締め切り後、各投稿申し込みに対して査読審査員を決定します。申し込みの段階で、編集委員が投稿をお断りすることはありませんので、申し込み後は、すぐに審査用論文原稿の執筆にとりかかってください。審査用論文原稿提出の締め切りは、来年1月末日(送り先は後日お知らせします)。審査結果は4月はじめに通知いたします。投稿申し込みにあたっては、「日本ロシア文学会会誌規定」「会誌執筆要項」「投稿審査要領」(会誌37号に掲載)もご参照ください。会誌中の「学会報告要旨」掲載については、投稿申し込みは不要です。

「早稲田大学 国際会議場」(総会・研究発表会・プレシンポジウム会場)  
「リーガロイヤル東京」(懇親会会場)  
「東京カテドラル」(ラフマニノフ「晩禱」演奏会会場)の位置関係



**総会・研究発表会・プレシンポジウム関連の交通・連絡先一覧**

**会場**

早稲田大学 学術総合センター(中央図書館・国際会議場)国際会議場

169-0051 東京都 新宿区 西早稲田 1-20-14

電話 03-5286-1755 (国際会議場事務局) 当日のお問い合わせは下記日本ロシア文学会事務局当日連絡先へお願いします。

**交通**

〔電車〕

東京メトロ東西線「早稲田駅」3a 出口 徒歩 10 分 有楽町線「江戸川橋駅」1b 出口 徒歩 15 分

JR 山手線・西武新宿線「高田馬場駅」 徒歩 20 分あるいは都バス(下記)利用

都電荒川線「早稲田駅」徒歩 3 分

〔都バス〕

「高田馬場駅」(2)のりば 「早大正門」行(学 02)→「西早稲田」下車

(4)(5)のりば 「上野公園」行(上 69) 「九段下」行き(飯 64)→「西早稲田」下車

「江戸川橋駅」(1b 出口)「早稲田」行き(上 58) 「小滝橋車庫」行き(上 69・飯 64)→「早稲田」下車

**日本ロシア文学会連絡先**

(事務局長：源 貴志 開催校代表：伊東一郎)

〒162-8644 東京都 新宿区 戸山 1-24-1 早稲田大学文学部 露文専修室内

電話： 03-5286-3740

メール： jimukyoku-jars@list.waseda.jp

当日連絡先： 03-3203-4141 (大学代表)(内線 5700) 国際会議場共同研究室〔1〕(10月7日・8日のみ)  
090-8455-4165 事務局長〔携帯〕(当日3日間のみ有効)

## ニコライ堂周辺図



「神田駿河台4」と表記のある場所が日本ハリストス聖教会・ニコライ堂です。

所在地

東京都 千代田区 神田駿河台 4-1-3

交通

JR 中央線「御茶ノ水駅」

東京メトロ丸ノ内線「御茶ノ水駅」

東京メトロ千代田線「新御茶ノ水駅」

連絡先

電話：03-3291-1885

当日のお問い合わせはご遠慮下さい。

## リーガロイヤルホテル東京



早稲田大学国際会議場から徒歩ですぐの場所です。16頁の地図をご覧ください。

所在地

〒169-8613 東京都 新宿区 戸塚町 1-104-19

交通

(14頁の総会・研究発表会会場の案内をご参照下さい)

JR 山手線・西武新宿線「高田馬場駅」戸山口よりシャトルバス 10分

連絡先

電話：03-5285-1121

メール：tokyo@rihga.co.jp

## 東京カテドラル



交通

JR 山手線「目白駅」より「新宿駅西口」行(都バス)

JR「新宿駅」より「練馬車庫」行(都バス)

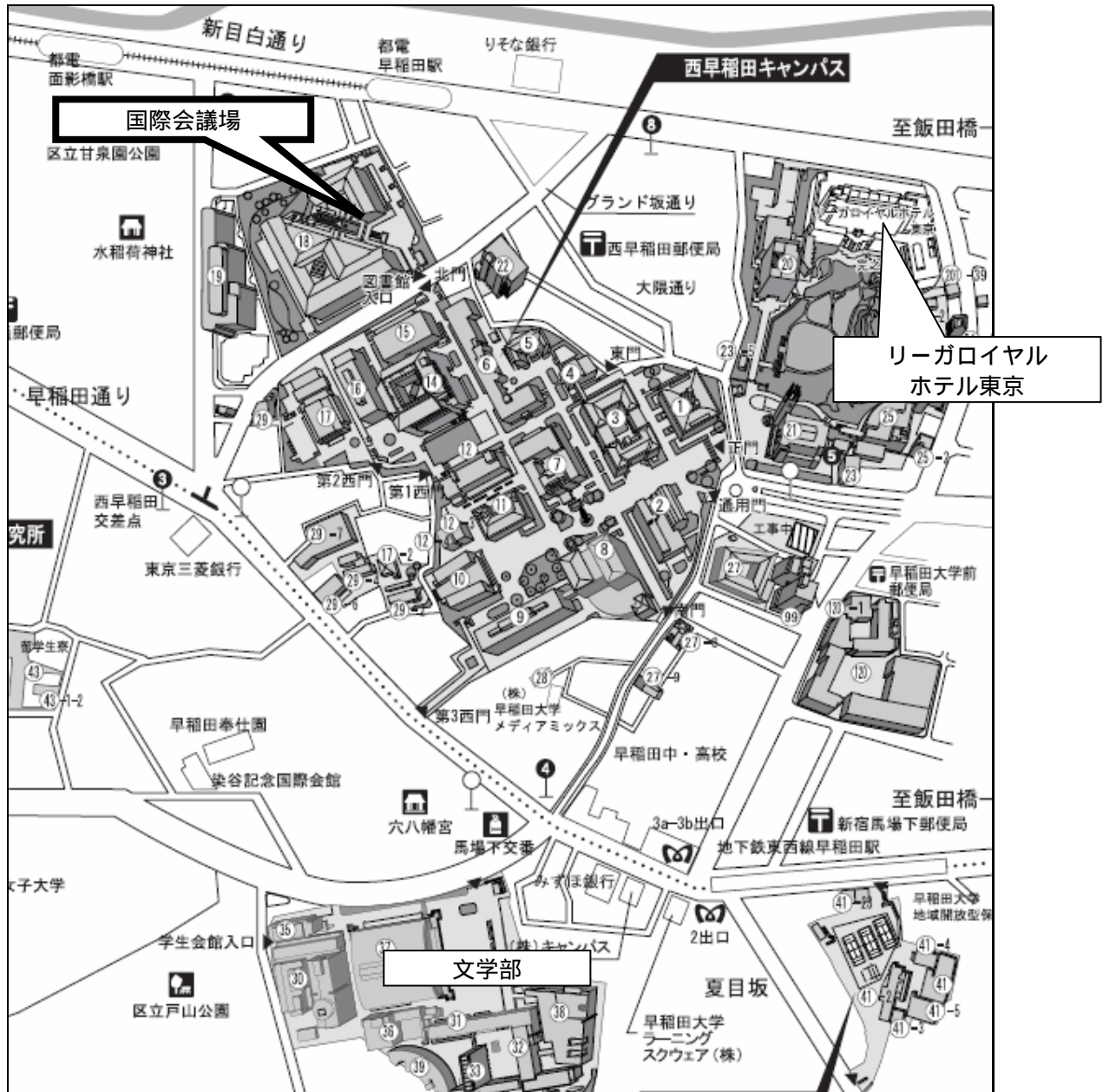
いずれも(白61)「椿山荘前」下車徒歩1分

東京メトロ有楽町線、「護国寺駅」Y11 南口(講談社側、出口6)より徒歩10分

同じく有楽町線、「江戸川橋駅」Y12(出口1A)より徒歩15分

演奏会の主催者・問合せ先等については2頁をご参照下さい。

早稲田大学周辺図（14頁の図・「交通・連絡先一覧」もご参照下さい）



当日の食事等について

今回はお弁当の手配等はいたしません。大学周辺には、飲食店・コンビニエンスストア等が複数所在しますので、随時それらをご利用願います。なお、10月7日（金）、10月8日（土）につきましては、西早稲田キャンパス内の食堂・店舗などがご利用いただけます。10月9日（日）につきましては、近辺で営業している飲食店の情報を当日会場にて提供いたします。

なお、国際会議場内にはコピー機の設備がありません。配布資料などは事前にご用意を願います。

日本ロシア文学会会報 第27号

（2005年8月25日発行）

発行人 川端香男里

編集人 日本ロシア文学会事務局

〒162-8644

東京都 新宿区 戸山 1-24-1

早稲田大学文学部 露文専修室内